

「受動から能動」

～受ける人？与える人？～

マタイ1：18～25、ルカ1：25～38

■ もうすぐクリスマス

私たちはこの時、どのようなことを考えなければいけないのでしょうか。ある貧しい暮らしをしている兄弟がいました。その兄は苦勞して働き、弟が願っていた車を買ってあげました。その車を使って弟は教会に行っていました。その時、弟の周りの人たちはその車を喜んでいました。しかしある少年はその車を与えてくれた人のように、周りに与える人になれたらと思いました。この少年のように私たちは受ける人から与える人への変化、すなわち物事の本質を見ていかなければなりません。受けることよりも与える人になりたいと願った少年を見て私たちの目線に変化をさせていきましょう。

■ 絶望の中に

(マタイ1：18～25) この当時、結婚する前に子どもができた大きな罪となり、石打ちの刑に処されていました。それ故、ヨセフはマリアを内々に去らせようとしていました。そのような時に天使が現れて事の次第を告げたのでした。天使が告げただけからといって現実的には何も変わらない中でヨセフはマリアを受け入れたのです。(ルカ1：25～38) 次にマリアに天使が現れたのでした。その時も事の次第を告げられていますが、マリアもその言葉を受け入れ「どうぞこの身になりますように」と告白するまでになりました。このように私たちの人生においても「何でただけ」というような事や「私の過去のあの事が原因でこの事が起こっているのか」と考えてしまうこともあります。私たちの歩みを振り返ると、良いことも悪いこともあったと思います。しかし良いことは忘れ、悪いことを覚えていて、傷んでしまったり、過去において悪い影響を受けた故に「どうせ私はだめなのだ」「必要とされていない」「愛されていない」と落ち込むためでしょうか。絶望とは2種類あります。1番目が自分の弱さから目を背けている状態(逃避)です。それは「忘却」「自殺」「閉じこもり」などを生みます。2番目が自分の弱さを認めない状態(反抗)です。それは憎悪を生み、周りを攻撃していきます。私たちはこの2種類の絶望の中にいる時は真の絶望に至っていないことが分かります。ヨセフとマリアは絶望の中に落とされました。マリアが婚前なのに妊娠したからです。その時、ヨセフは逃げようとしていました。マリアはそこでどのような行動に出たのでしょうか。このような絶望の中、イエスキリストは生まれました。イエスキリストは私たちの罪の身代わりとなり、十字架にかかるために生まれました。イエスの生涯を見ても弟子たちは政治的な王を求めていました。しかしイエスキリストは癒し、奇蹟をしたり、女性、子どもに関わったりと弟子たちとは見ている目線の違いに焦る気持ちがわいてきたのではないかと思います。そのような中で、イスカリオテのユダはイエスを追い込むと良い結果を生むことができるのではないかと考え、イエスを売りました。そうしたらそのまま当時の極刑である十字架にかかることになり、弟子たちは希望から絶望へと落とされ、漁師に戻ってしまう弟子までも。もう一度考えてみましょう。クリスマスとはイエスキリストも自らの立場を捨てて人となられた日、苦しむ事が分かっている、人類の贖いとして犠牲になることが分かっている生まれた日です。イエスの誕生をお祝いする喜ぶことと同時に自己中心の歩みを捨てる日とも表現できるのではないかと思います。私たちの人生を180度変化することのできる日、人々に良い影響を与えることのできる日なのです。

■ ①理解から信じるへ

私たちは頭で理解しようとして、この行為は非常に危険なのです。理解とは「人間的な行為」と定義されています。信じるとは「神に対する人間の関係を表す現象。自分を見つめて、自分を愛して、はじめて人間は神の前に立ちえる。そうして理解するのではなく、信じるによりようやく神の赦しを知る。」と定義されています。私たちは自分の知識によって理解しようとするのを止めないといけません。クリスマスに起こったことも知識で理解することをやめないといけません。それは理解したからするものではないからです。イエス様がこの世に來ら

れた目的を心で信じるからこそ、イエス様が生まれる前の4週間をアドベントと定め、ろうそくを灯し、ツリーを飾っているのです。ろうそくにも自分の身を削りながら周りを明るく照らすのです。それを象徴しています。ツリーは十字架を意味しています。私たちの心がどこに向いているのかを見つめ直し、「私たちは神様が好きだから〇〇する!」という思いを再確認したいと思います。

■ ②くれないシーズン!パート2

私たちは教会にきてまもない頃は甲斐甲斐しく関わってくれます。その期間を過ぎると私たちの関係が家族のようになり、関わり方が以前のようにありません。その時、〇〇してくれない!と感じてしまい、寂しさや痛みを覚えたりします。それは私たちが成長する時期に入ったことを示しています。子育てにおいても3歳まではしっかりと目を向けます。3歳を過ぎたら親は見守ることが多くなってきます。それは子どもが自立していくためです。私達も信仰生活の中で自立していくために、見守られる時期がきます。それは見捨てられるのではないのです。ずっと見ているのです。それを感じているからこそ、責任感も増してくるのです。ですからくれないシーズンは成長の時期であり、寂しさと痛みを乗り越える中で自立と自信を得させてくださいます。

■ ③見ゆるところによらず

ヨセフとマリアは頭で理解するのではなく目に見えないことを信じて進みました。聖書にはノアという人物がでてきます。彼は方舟を作るように命じられてから数十年、信じて作り続けていきました。そしてノア以外の人類は滅びていきました。ノアはどんなことがあっても見えない神様の言葉を信じて進みました。私達もノアと同じように神さまからの使命に対して従っていくことを求められているのです。それは私がしたい事と違っているものもあります。しかし時間が過ぎ、振り返ってみるとその道が正しかったのだということが分かります。自分にとって「良かれ」と思っていたことは過去から得ている知識に基づくものであれば、良い実を实らすことができます。今まで生きてきたことを変えるために私達には教会に来ているのです。その時が来たら、素直になりましょう。自分の中にあるプライドが邪魔するのであれば、それを捨てなければなりません。

■ ③見分ける力!!

私達に見分ける力がないと受動体になってしまいます。それでは周りからの影響を受けるだけの人になってしまうのです。神さまはいつも同じことをするように言われていない場合もあります。聖書に書かれている人物も神さまからチャレンジを受けた時、その都度、聴きながら行動していました。すなわち祈ることです。祈らないと見分けることができません。そして聴いたことと御言葉を照らして吟味していきましょう。それをしないと私達はズレてしまいます。私たちの行動1つひとつに対して神さまにあって正しい行動と言えるのでしょうか。しっかりと見分けていきたいのです。クリスマスとはそれをもう一度見直す時期なのです。私達たちが暗闇の光になっているのでしょうか。なぜなら私達たちは地の塩であり、世の光だからです。私達たちが自分の方法でしか歩んでいなければ、光にはなれないのです。ですから私たちの考え方をもう一度見直してみましょう。マリアもヨセフも絶望の中にあっても信じて「どうぞこの身になりますように」と祈り、見えないけれども神さまを信じて進みました。今日はアドベント2週目です。もうクリスマスはすぐ来ています。この時こそ、私たちの生きる姿勢が受動的なのか、能動的なのかを確かめる必要があるのです。先に救いを受けた私たちがどのように歩むのか。神さまは私達を見はなさず、孤児にはしないと約束して下さっています。神さまへ祈る中で自分の歩みを見分けて能動的に与える人生を歩んでいきましょう。

(要約者:平澤 一浩)